令和7年度

見方・考え方を働かせ、主体的に探究する生徒の育成

3か年継続研究　1年次

Ⅰ　研究の概要

1　本校の教育目標と重点

【　学校の教育目標　】
自ら学び　人とつながり　ともに未来を創る

この教育目標の実現を目指し、以下の「生徒に身に付けさせる3つの力」と「3つの力を育む3つのタスク」を重点目標に研究を推進する。

【　生徒に身に付けさせる3つの力　】
□ 自ら学ぶ力
①授業に集中して取り組み、学ぶことを諦めず課題解決に向かうことができる。
②基礎・基本を身に付け、獲得した知識や技能を活用できる。
③家庭学習など学習習慣を身に付け、計画的に学習を進めることができる。
□ 人とつながる力
④自分の良さに気づき、相手に気持ちや考えを伝え、表現できる。
⑤思いやりと感謝の心をもち、礼儀正しく挨拶できる。
⑥多様な価値観を認め、互いに尊重し合い、共に助け合うことができる。
□ ともに未来を創る力
⑦自分の役割と責任を果たし、協働して解決や創造ができる。
⑧夢や目標に向かって、強い意志でチャレンジできる。
⑨健康な身体と基本的な生活習慣を確立できる。

【　3つの力を育む3つのタスク　】
□ 指導方法の工夫・改善を目指す研修を推進する
□ 学級経営を基盤とした生徒指導の充実を図る
□ 成長を促す横断的な視点での環境（機会）を作る

2　研究主題設定の理由

Society 5.0 の到来と新型コロナウイルス感染症の拡大によって、社会はかつてないスピードで変化し、予測困難な状況となっている。このような社会情勢を踏まえ、中央教育審議会は、学校教育には、個々の児童生徒の個性と可能性を伸ばし、多様な他者と協調しながら変化に対応し、豊かな人生を切り開き、持続可能な社会の創造に貢献できる人材を育成することが強く求められていると指摘している。

次代を切り拓く子供たちの育成には、各教科の知識を習得するだけでなく、それぞれの教科特有の見方・考え方を活用し、探究的に学習に取り組む姿勢を育成することが不可欠である。

昨年度の研究では、授業における課題設定が、教科の見方・考え方を十分に働かせるものになっていないという課題が浮き彫りになった。この課題を克服し、生徒が主体的に探究する力を育成するために、教科の見方・考え方を重視した授業改善が必要である。

また、本校の生徒の課題として、生徒、保護者、教職員の三者から「自分で計画的に学習を進められない」という点が共通して指摘されている。この課題は、生徒が受け身的な学習に慣れ、主体的に学習計画を立て、実行する力が不足していることを示唆している。そこで、教科の見方・考え方を活用した探究的な学習を通して、生徒が自ら課題を設定し、解決に向けて計画的に学習を進める力を育成する必要がある。

以上の理由から、生徒が未来の社会で活躍するために必要な資質・能力を育成することを目指し、本研究主題を設定した。

3 研究仮説と研究の視点

(1)研究仮説

「生徒に身に付けさせる3つの力」と研究主題「見方・考え方を働かせ、主体的に探究する生徒の育成」との関連から、研究仮説を次のように設定した。

【 生徒に身に付けさせる3つの力 】
- □ 自ら学ぶ力
- □ 人とつながる力
- □ ともに未来を創る力

▼

【研究仮説】

仮説1 「個別最適な学び」の視点から

生徒一人一人が自らの課題を立て、その解決に向けて探究する学習活動を設定することで、生徒は自らの学びを最適化し、見方・考え方を働かせながら主体的に学習に取り組むようになるだろう。

仮説2 「学びの自己調整」の視点から

生徒と学習目標や学習評価、学習計画を共有したり、ともに作成したりすることで、生徒が見通しをもち、自らの学習状況を客観的に把握し、主体的に改善を図ることができるようになるだろう。

(2)研究の視点

研究仮説を検証するため、3か年の継続研究を計画し、研究の視点を次のように設定した。各年次研究において重点を定め、仮説の検証と授業改善を進めることとする。

	研究の視点
1	生徒の学びを最適化する、学習方法や学習形態の工夫
2	見方・考え方を働かせる探究学習の工夫
3	生徒が自己の学習状況を把握し、学びを自己調整するための学習活動の工夫

4 研究の全体構造と研究組織

(1)研究の全体構造

【校　　訓】「自立」「共生」「創造」
【教育目標】自ら学び　人とつながり　ともに未来を創る

【生徒に身に付けさせる3つの力】
- □ 自ら学ぶ力
- □ 人とつながる力
- □ ともに未来を創る力

【研究主題】
見方・考え方を働かせ、主体的に探究する生徒の育成

【仮説1】
「個別最適な学び」
生徒一人一人が自らの課題を立て、その解決に向けて探究する学習活動を設定することで、生徒は自らの学びを最適化し、見方・考え方を働かせながら主体的に学習に取り組むようになるだろう。

【仮説2】
「学びの自己調整」
生徒と学習目標や学習評価、学習計画を共有したり、ともに作成したりすることで、生徒が見通しをもち、自らの学習状況を客観的に把握し、主体的に改善を図ることができるようになるだろう。

【視点1】
生徒の学びを最適化する、学習方法や学習形態の工夫

【視点2】
見方・考え方を働かせる探究学習の工夫

【視点3】
生徒が自己の学習状況を把握し、学びを自己調整するための学習活動の工夫

(2)研究組織

校内研修

研究推進委員会
教頭
研究部長・学力向上係
部会リーダー

研究部会A　研究部会B　研究部会C

各教科
道徳・特別活動・総合的な学習の時間

研究活動の活性化、教職員一人ひとりの専門性向上と学校全体の教育の質の向上を目指し、研究推進委員会を組織する。また、授業改善の具体的な取組は、小グループを編成して推進する。